

★NPO法人シニアボランティア経験を活かす会 「人の役に立つ」って。 それが生み出す元気とパワー

開発途上国の国づくりのために尽力したい、その志を持って各国に派遣されるJICA（国際協力機構）海外協力隊（※）。任期は2年。69歳までの応募が可能で、定年後に応募する方も多くいらっしゃいます。今回は、任期を終えた帰国後も、その経験を活かして活動されているNPO法人「シニアボランティア経験を活かす会」会員の方々に話を伺いました。取材に協力してくださったのは、鈴木 新さん（理事長／76）、井上節子さん（監事／73）、広内俊夫さん（広報担当／73）、松田信治さん（理事／70）の4名の方々です。

工場管理の経験を活かし、ベトナムとメキシコで指導にあたりました。派遣期間はベトナムが2008年から、メキシコが2012年からの各2年ずつで、ベトナムに行ったのが65歳、2回目のメキシコから帰国したのが71歳でした。

井上さん 私は小学校教員の経験を活かし、ネパールの療育センターで障害のある子供たちと関わってきました。派遣時は57歳、派遣期間は2003年からの2年間でして、一旦帰国して短期派遣制度で同じ場所半年間赴任しました。

広内さん 私は、2004年、58歳の時に南米のパラグアイに赴任しました。日本人移住70周年を迎えた記念事業として行われた「70

周年記念誌」の編集に関わり、派遣期間は延長を含めて2年3か月でしたが、未完成のままの帰国となりましたので、改めて10か月ほど個人的にパラグアイに渡り、完成させました。

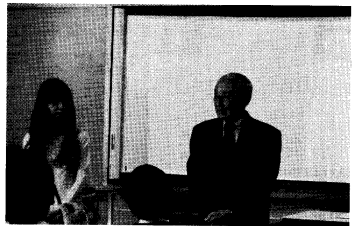
松田さん 私は、コンピュータエンジニアとして働きながら視覚障害者の伴走を30年近くやっていたので、視覚障害者支援で応募しました。派遣された国は中央アジアのキルギスで、マラソン大会を立ち上げたり、視覚障害者の伴走を行ったりしました。2011年に60歳で赴任しました。

—今、「シニアボランティア経験を活かす会」では、どんな活動をされているのですか

広内さん 記念誌編集の経験から、広報を担当しています。当会

は、国内で日本と開発途上国の架け橋になるための活動をし、今年で設立15周年を迎えます。主に、出前授業、翻訳、国際協力の啓発、JICAボランティア支援などを行っています。

井上さん 学校での「出前授業」は、私たちが派遣された各国の文化や国の様子を子供たちに伝えるものです。私たちの現地経験が役立てられないかと、東京都杉並区の協働事業に提案したのがきっかけです。子供たちには、書籍やインターネットではピンとこなかったことが理解できたと大好評！そのうち、学校からネイティブの人と一緒に来て欲しいとリクエストがあり、今は、留学生たちに協力してもらってペアで授業も行って



アオザイ（ベトナムの民族衣装）を着用したベトナム人留学生と一緒に出前授業を行う理事の鈴木 新さん。

をしています。

鈴木さん 私は、ベトナムの留学生にアオザイという民族服を着てもらって授業を行ったことがあります。

松田さん 私は、キルギス人の留学生で、視覚障害者の女性にペアをお願いしています。

井上さん 大人向きの市民講座もありません。ネパールの紅茶「チャ」を実際に作って飲むなど現地の暮らしを体験できるものは人気があります。

広内さん 国際理解や語学体験だけでなく理科系の授業もあり、例えば、死海の水と日本の水との違いを比較体験させた方もいます。いろいろな専門家がいますので、授業内容も多種多様です。

—そのほかの活動は

井上さん 喜ばれているのは、「学校連絡文書」の翻訳です。新宿区の大久保小学校は、在籍児童の半分近くが外国籍で、保護者の多くは日本語を話しても読めないのので文書でのお知らせが伝わりません。言葉だけでなく、「運動会って何?」「なぜ体操着に着替えるの?」など風習の違いで伝わらな

い事柄もあり、補足説明が必要な場合もあります。翻訳は現在、10か国語に対応、留学生にも協力してもらって10年以上続けています。

鈴木さん 新しい取り組みとして、中小企業支援を考えています。JICAに中小企業海外展開支援事業が新設されたのですが、それに応募したい中小企業さまに対して企画書作成など応募のサポートをするもので、現地で活動してきたい我々だからわかる情報を活かしたいと思っています。

松田さん 私は、帰国後にも現地支援活動ができるように、在任中のキルギスで任意団体「キヤル基金」を立ち上げ、今はそれをベースに支援活動を行っています。キヤルはキルギス語で夢という意味です。

—皆さま、ご自身の経験を活かせることをご自身で提案し、切り拓いていかれているのですか

広内さん そうです。現地では、自分に何ができるのか、何が役に立つのかを試行錯誤しながら、実践を重ねることの繰り返しでしたから。

鈴木さん そして、そこで生まれた信頼関係、人との絆は強いもの

です。今も、私を信頼してくれてベトナムやメキシコから相談メールが届きます。

広内さん 私も、帰国して10年後に編纂仲間誘われて、パラグアイ移住80周年祭を訪れました。驚いたことに、当時の私が作ったボランティア精神の標語が今も継承されていると聞き、感動しました。「多少の不安があってもとにかく一歩前に出ること」、「そのうちみんながついてくると希望を持って進むこと」など、自らを鼓舞していた言葉です。

—ボランティア精神が元気とパワーの源なんですね。JICAボランティアの経験がなくても国際貢献をすることはできますか

井上さん 身近なところでは、市町村にある「国際交流協会」で情報をもらうことができます。外国籍の子供が多い地域では、放課後、彼らに日本語を教える人材を募集しているところがあります。また、国際協力イベントや市民講座に足を運んで理解を深めることも、第一歩になると思います。

松田さん JICA海外協力隊も、今年から制度が変わって、専

門性がなくても、向こうの村おこし、町おこしがやりたいという気持ちがある人も応募ができるようになります。

鈴木さん 海外ボランティアで何ができるのかと迷っている人に、あなたの人生の経験ならこういうことができますというアドバイスをを行うのも我々の役割です。

広内さん シニアボランティア経験談をまとめた『シニアの挑戦！国際協力の現場を語る（第4集）』の刊行時、祝辞としてJICAより「シニア世代が新しく始めることへの応援歌」、「人生100歳時代への希望の糧」という言葉をいただきました。まさに当会の最長現役会員は89歳なんです。

—弊誌「エール」の精神も同じです。ありがとうございました。

NPO 法人「シニアボランティア経験を活かす会」
<https://jicasvob.com>
 随時帰国報告会・体験発表会などを行っています。
 お問い合わせ先
 郵送：〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-6-15 USビル 8F
 NPO 法人「シニアボランティア経験を活かす会」宛
 Eメール：
info@jicasvob.com